

故 神田日勝君を憶う

砂田友治

彼は若かったが、いい作品を残した。そのことは、遺作を見てははっきりとそう思った。もっと長生きしたらと惜まれてならない。私は、彼とは地方展について訪ねてこられたとき語った以外に、あまり知るところがないので感想だけを少々述べてみたい。

彼は、農業をやりながら絵をかいた。この点について彼は、冬はほとんど暇なので絵をかくのに恵まれると語った。なるほど、合理的にもみえるが、そこに大きな苦痛があることを想像した。どんなことにも耐える強気と若さがあるのだが、甘いものではないようだ。

もちろん、趣味でかいているなどというものではない。こうして、土から作物が穫れたように、大地に足をつけた生活から、面白い画題を出してくれた。そして、素朴で力強い表現は、独特の説得力があり、また魅力が

あった。

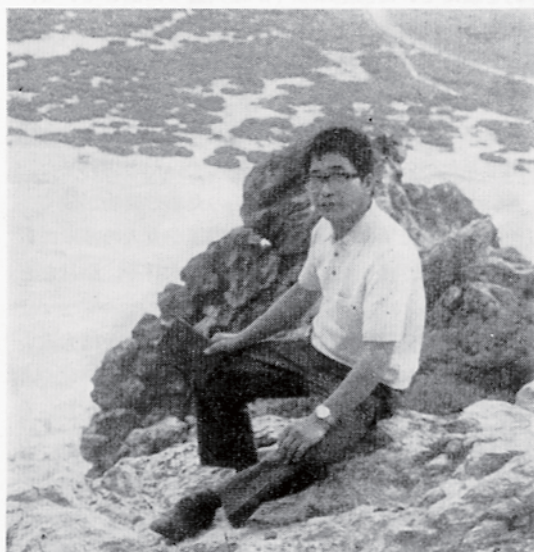
ドラム缶とか、散乱したえのぐとか、仕事を終えてぼかんとした一時の自画像といった具合。

腹を割かれた驢は印象的であった。最後が古新聞に囲まれた自画像である。この絵は、昨年 of 全道展出品であり、亡くなった後での独立で、評判のよかった入選作であった。視覚の原理を較果的に使った知的な画面構成、また、スネの毛一本までもかくという、不思議な魅力を持っていた。そして、更にそこはかたく漂う孤独感が暗示的であった。

彼のリアリズムは、本筋の一つであったと思う。手遅れになれば、どんな丈夫でも死なねばならぬ掟であるのに、本当に残念であった。ご冥福を祈る。



第38回独立展 室内風景 故神田日勝



在りし日の故神田日勝君

追悼

— 国井澄さんのこと —

梶内忠男



円熟期にあった故国井澄さん

2月28日、日曜日の昼。国井さんの容態がおかしいと本田氏から電話がかかった。まさかと思って、砂田氏と3人で駆けつけたが、既におそかった。

5日ほど前から肺血栓を併発し、胸の痛みを何度も訴えながら、世を去ったのである。

喘息で、3年余りも入院されていたのであったが、最近、だいぶよい方向に向かったと聞いていたので、全道展の集まりにもそろそろ顔を見せてくれるのではないかと、皆で噂していた先失きであった。

国井さんは、いつも元気で、体の具合が悪いなどとは聞いたことがないだけに、喘息になったこと事態、画友たちにとって意外だった。

闘病生活中にも、発作がおこならい限りでは、病室で絵も描けたし、時には外出もできたようである。

53歳といえば、まだまだ若い。子供たちも、みな立派に成長され、人生これからというところであった。3年前には渡欧の準備もでき、旅の夢を描いていたにちがいない。

想えば、30年前である。札幌で開かれた独立美術の夏期洋画講習会で、はじめて国井さんに会った。容姿端麗な彼は、夏のうだるような暑い日にも、きちんと背広を着て絵筆をふるっていた。鼻高く、色白で、髪長く、画家の風貌だったことからすぐ憶えた。

独立展出品には、リュックを背おい、巻いた絵を鉄砲

のように肩に担いで、度々一緒に上京したのもだった。第16回独立展（昭和23年）には、第2室に陳列され、意気揚々としていた。印象派風の描法で、丹念に描きあげた50号の農村風景だった。

几帳面で荘厳な性格が、そのまま画風に現われていたように思う。次第に絵が様式的なものとなってきたが、後期の仕事に移る頃には、挑山時代の美術の美しさや、東洋的なものにあこがれ、光琳、宗達の絵に関心をもっていたようだ。

一本の木を描くのに、「この木よ、立ってくれ」と、祈りをこめて描くのだ、といていた。直線的に対象へと迫り、自然の中に精神をみることを考えていたようだった。

風景が主題だったので、よく旅行をした。そして精神的に絵を描いた。旅の楽しい思い出も数々あったようだ。厳正で、自己の意を曲げない面と、情の深さをもつ彼のエピソードは、数多い。宴会などで、酒がまわりだすと、オイ、早く酔え、元気ないぞ、どうした飲め、とまわりをぶちかました。軍歌、寮歌、童謡など声高らかに歌った。「愛と、情熱と、真実」は、彼の信条で、どこへいっても力説したものである。

病院での生活にも仕事をおしみなく続け、大小の作品がたくさん病室に残されていた。